

インクルーシブ教育実現に向けての構想

中邑 賢龍

東京大学先端科学技術研究センター

魔法のプロジェクトは、障害のある子どもを訓練して健常児に近づけるのではなく、彼らの残存機能を ICT 機器を活用して引き出し、場面設定によって今まで出来なかった学習・生活体験をどのように創り出せるかという実践をプロジェクト開始当初から積み上げてきた。

今年度は「インクルーシブ教育」をテーマに掲げた。ICT 機器を活用することがインクルーシブ教育の鍵になるからである。出来ないことを出来るようにするのは通常教育・特別支援教育に関わらず教育が目指す一つの目標であることに違いない。残念ながら、通常教育においては一斉指導が原則で、そのクラスにいるためには他の子どもと同じように出来る必要がある。出来ないなら、そこに在るよりは個別の指導が受けられる特別支援教育に移行すべきだという考えが主流である。その中で、魔法のプロジェクトの多くの実践は ICT で障害を補償することで一斉指導に戻れる子どもの存在を示してきた。彼らがインクルーシブ教育を受けること当然のことであるが、未だに ICT による能力補償に試験など公平性が問われる場面で抵抗感をもつ教師もいる。これについては、過度な公平性の主張が排除・差別を生み出すことを理解する必要がある。魔法のプロジェクトでインクルーシブ教育を受けた彼らの中等・高等教育への移行を追跡する中で、具体的な事例を示せば、抵抗感は消失するであろう。

一方、重度知的障害のある子どもは ICT で機能補償しても通常教育の授業参加は困難であり、分離教育の中でこそ個別最適な学びが実現できると考える人が、特別支援学校の中にも多いと感じる。しかし、常時、特別支援学校で学ぶのではなく、可能な時間は通常学校で学ぶ工夫があってもおかしくない。通常教育の中で「どの子ども取りこぼさない教育」というスローガンが掲げられることがあるが、それは入試で一定レベルの学力のある子供を選抜したクラスであれば実現できるかもしれないが、選抜なく様々な子どもが入ってくるクラスに関して言えば無理がある。ましてやインクルーシブ教育で重度障害のある子どもが在籍するクラスであるとハードルは高い。しかし、「どの子ども取りこぼさない」という意味を「同じ学力レベルまで引き上げる」と考えればそれは難しいが、「学びの場において排除しない」と考えれば実現は可能である。

今年度の魔法のプロジェクトに参加した先生が、実際にインクルーシブ教育の場面を作り出せたかと言えば、それはハードルの高いものであった。なぜならば、通常教育の先生は担任する小中学校のクラスの中で、特別支援教育の先生も担任する特別支援学校のクラスの中で日々の授業を実施する必要があった

からである。そこで今は実現できないが未来に備えてシミュレーションしてみましようというテーマであった。つまり、今年の実践の対象となる子どもがインクルーシブ教育の現場に連れて行かれるとしたらどんな実践が考えられるか考えてみてくださいというお題であった。

インクルーシブ教育の一番の魅力は子どものエネルギーを相互に伝え合うことができる点にある。全くリズムもペースも違う大人数の子どもが触れ合う時間こそ、分離教育では得られない機会である。それが何を生み出すかわからないが、教師が意識して回数を重ねなくても、多くの子どもが自然にその場を無限に作り出してくれる場ができたなら最高である。感覚過敏性のある子どもに対してさえ、交流は必要であり、その場が設計できれば、彼らの社会への移行はより容易になるかもしれない。

今回の魔法のプロジェクトは難しいテーマだったと思えるが、一部の先生方の報告書の中に、新しいインクルーシブ教育に関する素晴らしい構想とシナリオが示されている。次年度はその先生たちと ICT 機器を抱えて全国キャラバンを展開する。新しい技術を体験し、教育の課題を議論し、インクルーシブ教育に向けてのシナリオを学んでいただく「魔法のプロジェクト 2024」が動き出す。